



子宝神社の巫女奉仕

基本CG 37枚 総枚数 187



ここは子宝神社だから
両想いの男女は
発情してしまうの」



「可愛そうな童貞ちゃんぽは



ぜーんぶウチが慰めてあげるね」



母は「みなさまの逞しい男根を



私の中に捧げてください」と言いました



NTR要素無し









子宝神社の巫女奉仕



STORY

本編

毎日を必死に生きている間は「何のために生きているのだろう」と考える暇さえなかったが、今朝はその疑問が頭をよぎるのだ。昨日バイトをクビになってしまったせいだろう。妹の学費を稼ぐために部活をサポートして友達とも遊ばず働いていたが、どうにも生活すらままならなかった。未払いの残業代を払ってもらえるようお願いしたのだが口論に発展した末クビになってしまった。学校には内緒のバイトということは店長も知っていたので足元を見られていたのだと思う。今日はバイト探する気にもなれず、久しぶりに部活に出ようと弓を担いで学校に向かっていった。

あまり深く眠れず、やけに早起きしてしまったので、朝練までだいぶ時間がある。どうやって時間を潰そうか思案していると偶然、神社の前を通りがかった。折角だから神頼みでもしていこうかと思い、神社の鳥居をくぐって境内の奥へ進んでいった。早朝だというのに妙に人の声や物音が聴こえてくるが人影はまったく見当たらず少し不気味だ。



神社の奥では一人の巫女さんが掃除をしていた。
彼女にはどうにも見覚えがある。

「あれ■■■君？」と彼女は驚いたような声を上げた



「ミコ先輩…おはようございます」

彼女は弓道部の部長を務める

孕海弓子（はらうみゆみこ）先輩だ。

皆からは名前の後ろの方をとって「ミコ先輩」と呼ばれて慕われていた。

まさか本当に巫女さんだとは思ってもなかった。

「■■■君は今から朝練？すごく早いね」と先輩は微笑んだ。

「先輩の方こそ朝早いですね、お疲れ様です。」
サボりがちな自分は部活の中でも腫れもの扱いなのだが、ミコ先輩は他の人たちと違い、分け隔てなく接してくれる。

しかし、これ以上会話を掘り下げて良いのか判断に迷う。
彼女の仕草は明らかに
見られたくない姿を見られたような
ぎこちなさを帯びていた。

「それじゃあ僕はこれで失礼しますね」
「あの…くわしく訊かないの？何でここで働いているか…」
先輩は不安そうに訊いてきた。

「心配せずとも誰にも言いませんよ…言うような友人はいないですし、僕だってバイトしてましたし…そういえばこの神社は人のいるような気配はあるのに人影が見当たらずに不思議な感じがしますね」会話を逸らしたつもりが逆に核心を突いてしまったようだ。彼女はひどく取り乱しながら「そのあたりで男女が盛りあつてゐるんでしょう」と答えた。
「え？男女が？盛りあつて？何を言つて？」といってあたりを見回すと林の中に紛れて男女が盛りあつてゐるのを見つけた。







「先輩これって？」

「うちは子宝神社だから
訪れた両想いの男女は発情して盛りあつてしまうの」
まるで意味不明な説明に混乱した。



彼女は顔を赤らめながら続けた

「ごめんねこんな気持ち悪い神社で…」

でも安心して、両想いでなければ君を襲つたりする人はいないから」
僕は少なからず先輩に好意を抱いているが、
どの程度好きあつていると発情するのだろうと良からぬことを一瞬
考えてしまった。

林の中から胸元を露わにした巫女さんがこちらに向かってきた。
「あれえ？おねえのお友達？おちんちん勃ってる♥抜いてあげよっか♥」
衝撃的な第一声だった。

「いや俺は…」と咄嗟に断ると全てを見透かしたようにニヤニヤしながら
「そっかあ♥…おねえのこと好きなの？」と訊いてきた。

「ちよつと！何言ってるの梓！
…ごめんねうちの妹が…」と

ミコ先輩が割って入ってきた。

梓と呼ばれた彼女は悪びれる様子もなく、
むしろ面白がって

「おねえのおっぱい揉ませてあげたら？」と
続けた。



ミコ先輩の様子が明らかにさつきと違ってきていた。
身体は赤く火照って息遣いは荒くなっている。
「私は構わないけど」と自分のおっぱいにぎゅつと手を埋めながら答えた。
明らかに発情している。そうか僕は両想いだったんだ。

ミコ先輩は僕の手を引いてあまり人けのない林に連れ込むと
大きな乳房をさらけ出した。

僕はこれ以上正気を失う前に彼女の気持ちを
確認しておきたかった。
「僕たち両思いみたいですわね。何で僕みたいな
どうしようもない人間が好きなんですか？」

「知ってるよ、君が妹さんのためにがんばってること。」

「誰に聞いたんですか？」

「妹さん本人に…生徒会で一緒に仕事してる時聞いたの。」

『お前は俺と違って何でもできるから進学しろ』って言われたって…

それを聞いたとき『かつこいいな』って思ったの♡

同じように生まれで苦労して、同じように妹がいて…なのに私とは違って

運命を変えようとがんばってる。私も…はあ♡…

…がんばら…なきや♡って…ん♡…思ったのお♡」

お互いの理性が崩れ去っていく音が聴こえたような気がした。



初めてのHで何をどうしたらいいのか分からない。
いきなりおっぱいを揉みしだくのは
なんだか情けないような気がして、
遠慮がちに片方を持ち上げてみた。
肌に吸い付くようなモツチリとした弾力と
ずっしりとした重みを感じる。
汗とシャンプーの香りが混じり合った
甘酸っぱくてクラクラする香りが鼻孔を撫でる。



「どう…かな？」ミコ先輩は恥ずかしそうに言った。
「すごいです…」と小学生並みの感想を述べてしまった
「ん♥…そう…嬉しい♥」
「…どうしたらいいんですかね？」
「すみません…勝手が分からなくて」
「どうしたっていいんだよ？好きにして？」





「もっと激しく♡もっと♡」と懇願する先輩。
どれくらい強さで揉めばいいのか加減が分からないが
力を込めれば込めるほどとろけるような甘い喘ぎ声が漏れだし、
そのうち壊してしまいそうだった。





絶頂を迎えた彼女の乳房からまるで射精するがごとく
勢いよく乳白色の液体が噴き出した。

「これは一体…？」と動揺して尋ねると
彼女は息も絶え絶え答えた
「うちは子宝神社だから…
常に母乳が出る体質なの」
まるで意味不明である。
全ての説明をそれで済ませてしまいそうな
勢いがある。



「これが生のおちんちん…こんなに近くで見たり触ったりするのは初めて…すごい熱くてドクドク脈打って何だか苦しそう…これ…梓がいつもやってるみたいに手でしごいたり啜えたりしたらいいのかな…ねえ？どうしてほしい？」と先輩は物欲しそうに「くくん…んっく」と生唾を飲み込んで喉を鳴らしながらおちんちに興味津々だ。僕は先輩の乳房をやりたい放題してしまったので「先輩の好きなようにしてください…」とお願いした。



先輩は独り言のようなものをぶつぶつ呟きながら
一心不乱に僕のちんぽをしゃべっていた。



先輩が「好き♥好き♥」と呟きながらおちんちんをしごく度
僕のおちんちんはそれに呼応するかのように「ビクン♥ビクン♥」と
脈打った。

「おちんちんで返事してる♥可愛いね♥大好きだよ♥」

「先輩…僕もう無理です」
「無理だから？どうしてほしいの？止める？」
先輩はちよつぱり意地悪な笑みを浮かべた。
「…だから…くちでしてほしいです」
「素直でよろしい♥」先輩は嬉しそうだ。





朝シャワーを浴びたわけでは無いので、
昨晩洗ってから8時間は経過してる僕のおちんちんは
自分でも少しツンとくる匂いがした。
それでも先輩の温かな口は躊躇なくおちんちんを包み込んだ。
まるで御馳走を前にした獣のように唾液がダラダラと分泌され
おちんちんにヌルヌルとまとわりついた。







先輩の大きな胸がおちんちんを左右からしつかりと圧迫してくる。
さらに上から口で啜えこまれ、おちんちんが逃げ場を失ってしまった。
物欲しそうな上目づかいで見つめられると今にも射精してしまいそうだ。



















「挿入するね♡初めてで怖いから…私が動くね」
先輩は僕にまたがって局部同士をぐにぐにと密着させた。
ぬるぬるのおまんこに吸い込まれるように
「すぷっ」とおちんちんの先っぽが入っていった。





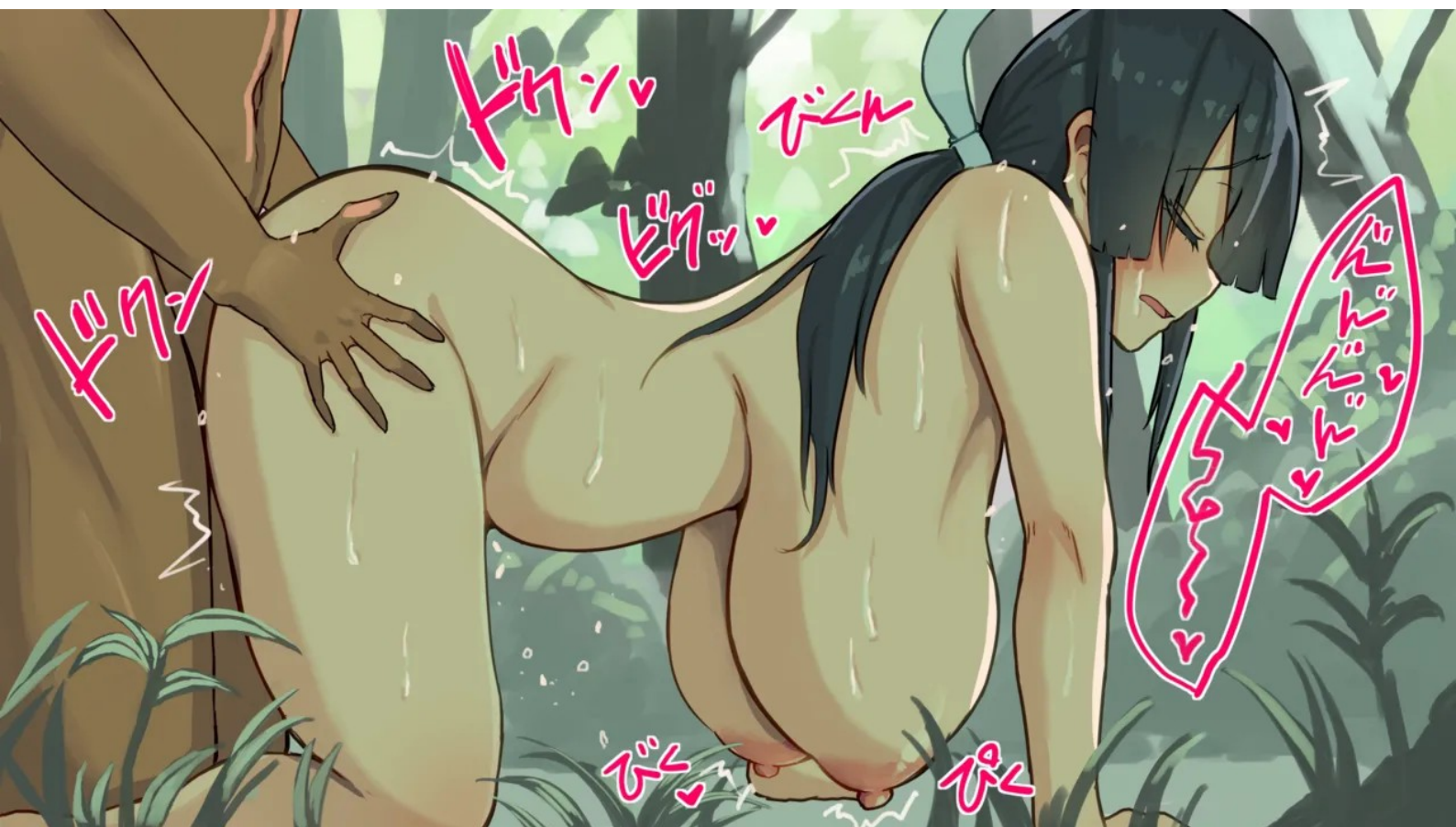






























びくん♡

かや かや

びく

おほ♡

はひやふ♡
キキセえ♡

がが がが

しゅき♡♡♡

びく

その少女はミコ先輩の妹で孕海梓（はらうみあずさ）という名前だ。
彼女はこの子宝神社を訪れた独り身の男性を慰めていた。
誰に命じられた訳でもない。
彼女の奇行はミコ先輩の悩みの種らしい。





「可愛そうな童貞ちゃんぽは
ぜーんぶまとめてウチが慰めてあげるからね♡」
そう言っで嬉しそうに梓は何人もの男性を
同時に相手にしていく。











じゃほ
ちゅふ

ん
パン

ん

パン

ズパン

ちゅ

ぬちッ
すちッ





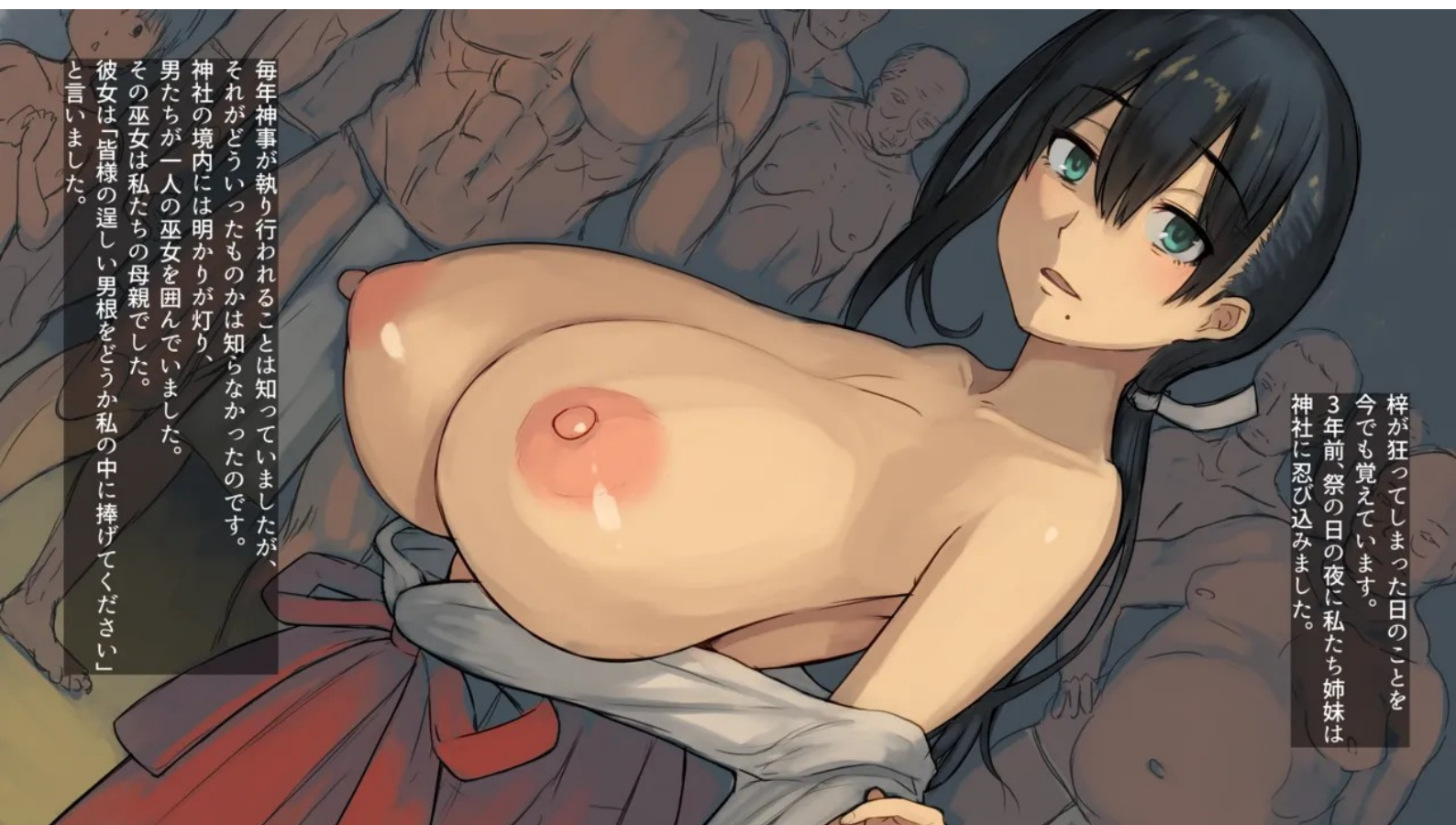






梓が狂ってしまった日のことを
今でも覚えています。
3年前、祭の夜の夜に私たち姉妹は
神社に忍び込みました。

毎年神事が執り行われることは知っていましたが、
それがどういったものかは知らなかったのです。
神社の境内には明かりが灯り、
男たちが一人の巫女を囲んでいました。
その巫女は私たちの母親でした。
彼女は「皆様の嬉しい男根をどうか私の中に捧げてください」と
言いました。



私たち姉妹は木の陰に隠れて母親が輪姦される様をただただ見ていました。
足がすくんで動けません。声も出せませんでした。



母親の獣のような喘ぎ声が境内に鳴り響き、
もしかしたら母親がこのまま殺されてしまうのでは無いかと
涙が止まりませんでした。







あの日、母は家に帰ってきませんでした。3年間ずっと行方不明です。それからというもの梓は狂ったように性行為をするようになってしまいました。

私はあのお祭りについて調べました。

豊作の年は米を奉納し、

不作の年は巫女が犯される様子を神様に披露するという風習が昔はあったそうです。

ちょうどあの年は酷い不作で

廃業する農家さんもいたほどです。

母親は頼まれたのか自発的かは分かりませんが

古い習わしを再現したのでしょうか。とっても優しい人でしたから。

私は真実を知って母に失望しました。心底くだらないと思ったのです。

豊作になるまで毎年毎年巫女を犯せばいつか必ず豊作の年がやってくる。

そんなことは私にも分かりました。あんな何の意味もない習わしのために自分自身を深く傷つけ、家族を捨てて去っていったのです。

そして優しかった母親をこんなにも憎んでしまう私自身が私が一番憎いのです。

ミコ先輩は全てを僕に打ち明けました。

僕はなんとかミコ先輩の役に立ちたいと思い、ある提案をしました。

「先輩…本当に良いんですね？」

「ええ、君の言う通りにしてみる」

ミコ先輩と僕は社務所の中で2人きりでいた。

彼女は前と同じように巫女服の胸元をはだけさせて乳房を露わにした。



「上手いけば梓は正気に戻るかな」

「保証はできないですけど、

もし、失敗したら次の手を考えるだけです」

僕も服を脱いで局部を先輩の眼前に差し出した

































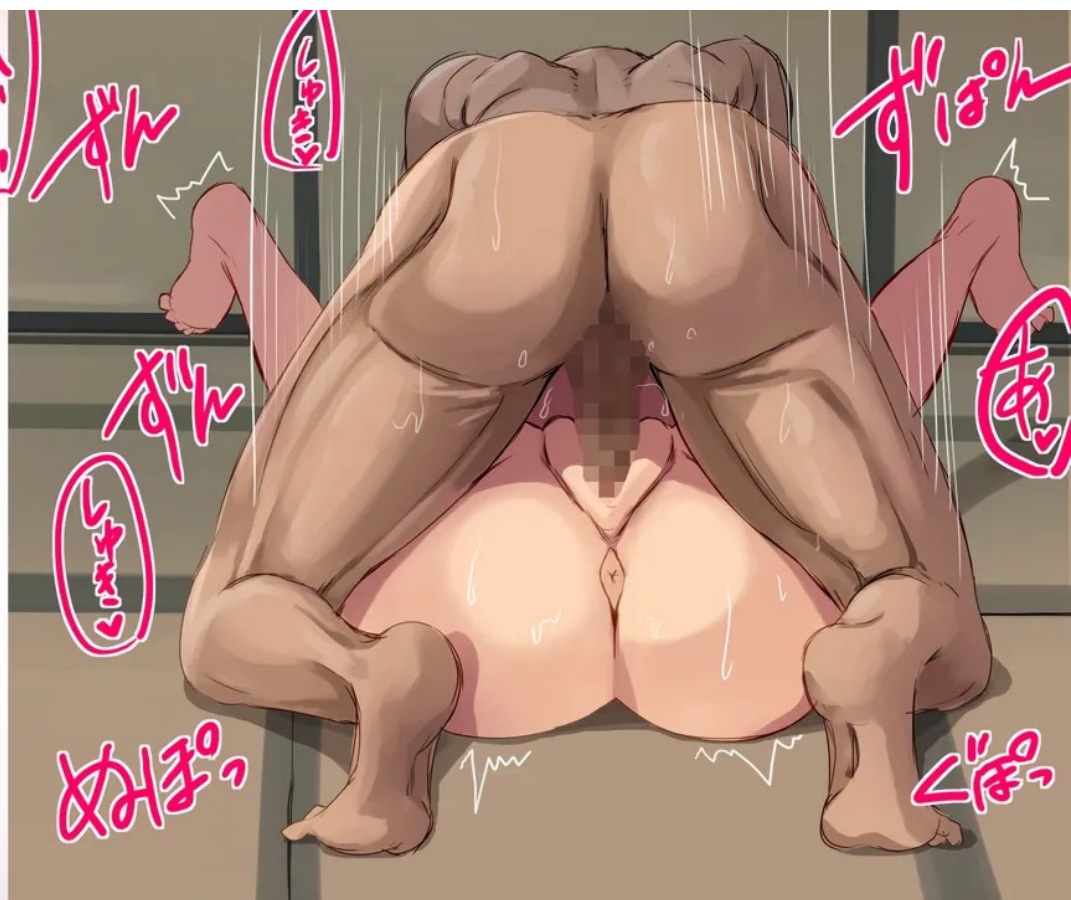
























あれからというものは梓はすっかり大人しくなり

誰であろうと神社でのあらゆる性行為は禁止(即通報)となった。

そして僕自身はと言えばミコ先輩と楽しい日々を送っている。

よくよく考えればバイトなんて探せばいくらでもあるし

悲観することも無かった。

この神社の因習はミコ先輩の言う通り何の意味もなかったのかもしれないが、稲作だろうと子作りだろうと何だろうと成功するまで挑戦すれば

絶対に最後は成功するというのは教訓として間違っていないかもしれない。最後になるが、梓が早く理想の両想いちゃんぽに会えることを祈っている。





ARTWORK 文字無し差分

























































